

文書館の逸品展

# 「徳島の歴史資料に見る 感染症」



里浦村立伝染病院（昭和5年）



結核予防デー（絵はがき）

期 間

令和4年 2月1日(火)~ 4月24日(日)

会 場

徳島県立文書館 2階 展示室

開館時間

午前9時30分~午後5時

休 館 日

毎週月曜日（祝日の場合は翌日）・毎月第3木曜日

入場  
無料

展示解説

2月11日(金・祝)・3月12日(土)・4月13日(水)  
午後1時30分~2時30分

❖歴史講演会❖

事前申込制

「江戸時代の人々の暮らしと感染症」

奈良女子大学教授 鈴木 則子氏

2月19日(土)午後1時30分~3時 徳島県立二十一世紀館 イベントホール



文化の森総合公園 徳島県立文書館  
Tokushima Prefectural Archives

〒770-8070 徳島市八万町向寺山  
Tel.088-668-3700 FAX.088-668-7199  
<https://archiv.bunmori.tokushima.jp>



## ごあいさつ

新型コロナウイルス感染症の猛威が私たちの生活に様々な影響を及ぼすようになって早くも2年ほどの時間が経過しました。

歴史を振り返ってみると、このような感染症・伝染病が私たちの暮らしに大きな脅威となったことが度々ありました。約百年前に広まった「スペイン風邪」（1918-21年に流行）は、当時の世界の人口の3分の1に近い5億人以上の人が罹患するというパンデミックの事態から兵員不足を招来し、第一次世界大戦を終結に向かわせたとも言われているほどです。

私たちが暮らす日本の社会においても、疾病の原因が未解明だった江戸時代では一旦感染症が流行ると神仏への祈願や疫病を払うための祭礼、そして様々な民間療法で対処していました。それが、明治の世になって西洋から科学的・医学的な知見が広まるとともに、公衆衛生の観念も普及し始めます。しかし、それでもコレラや赤痢・腸チフスなどの伝染病が繰り返し流行しました。

その後、「伝染病予防法」の制定（1897年）や避病院の整備、予防接種の普及を含めた医学の発達などによって次第に感染症・伝染病を克服できるようになりました。

今回の逸品展では、当館が所蔵する関連資料から、コレラ・赤痢・チフス・天然痘・結核・家畜感染症、そして新型コロナウイルスにいたるまで、様々な感染症・伝染病に向き合ってきた私たちの歩みを紹介します。

私たちは、こうした歴史から様々な教訓を学び取る一方で、現在猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症に関連する資料を収集し、将来の人たちにその教訓を残さなければなりません。当館でも関係資料の収集に努めているところです。資料を後世に残すことによって、将来の人たちの歩みを助ける責務が私たちには課せられています。歴史に学ぶとともに、資料を守り伝えることで現代の社会が作り出す新たな教訓を語っていくことができるのです。

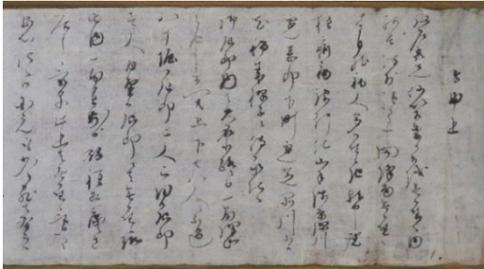
末尾ながら、企画展の開催にあたり、ご協力いただきました関係の皆さまに心より感謝申し上げます。

令和4年2月1日

徳島県立文書館長 石尾 和仁

## 幕末のコレラ騒動

コレラはコレラ菌による感染症で、激しい下痢・吐き気・嘔吐・腹部痙攣などの症状を伴い、最悪の場合2～3日で亡くなる病である。日本へは中国・朝鮮を経て伝播し、1822（文政5）年頃最初に流行したとされる。『日本疾病史』にはコレラに罹ると「甚だ暴卒の急症、二三日を出ずして死す」恐ろしい病と記されている。コレラは開国後、幾度となく流行するが、1858（安政5）



江戸の惨状を知らせる「池部真榛書簡」

年6月頃長崎から広がったコレラは、大坂・京都に至り、7月には江戸へ達している。江戸の惨状について国学者の池部真榛は「虎狼痢病流行仕、山手・浅草・深川辺甚敷、下町辺・芝・品川等は尤稀成様子に伝承仕候」と大流行を報告している。『嘉永明治年間録』によると、江戸での死者は「流行始終七月二十日頃より九月十日頃迄（中略）凡そ三万人程之死亡と云ふ」と記されている。また徳島で

のコレラについては「北谷繁蔵記録」（『阿南市史史料編』）に8月頃、「此病死人さハリ候得ハ、忽うつる事うたがいなし木岐浦（現・美波町）二十五人死る（中略）此病一日二日之間二死者も有、多ハ一日之間、また即死也」と病状を詳しく記している。さらに翌年8月に神山地方でも「平次兵衛三女勝（中略）是もとんころり、其余処々沢山也」（「嘉永六年万覚帳」/佐々木家文書）と流行し、村人が次々と亡くなったと記されている。その後もコレラは全国各地で繰り返して流行し、多数の犠牲者を伴いながら幕末の社会を混乱させていった。

## 江戸時代の徳島における「痢疾」

赤痢は日本では奈良時代にはすでに存在していたとされている。その呼称は赤痢のほか、チクソ・痢病など、江戸時代は主に痢疾・痢病・シブリハラと称された（『日本疾病史』）。

ここでは江戸時代の「痢疾」について紹介するが、当時は現在のように病気を識別できなかったため、「痢疾」は腹痛や下痢を伴う他の病気を指している場合もあったと思われる。

東端山（現・つるぎ町貞光）の肝煎（村役人）が作成したと思われる記録によると、1798（寛政10）年5月に痢疾が各地で流行していた。東端山も感染者が増え、7月に徳島藩から医師が派遣された。同月から10月の間、医師2名（後さらに2名増員）が東端山・西端山・貞光村（現・前同）・穴吹山（現・美馬市）を往診している。この時の罹患者数は不明だが、7月18日に往診先で40～50名が治療を願い出るほどであった。

「流行痢疾大妙薬」によると、当時の徳島には「大妙薬」なるものが存在したらしい。それは紅花を詰めた猿の黒焼きである。これは藩主が家臣に調合させたという薬で、大勢の人が服用していたという。真偽や効果のほどは不明だが、痢疾の流行下において、当時の人がどのようなものを薬として捉えていたかがわかる資料である。



「痢疾病者共為御手当御医師様御出御逗留中諸控」

## 複雑にからみ合う腸チフスの歴史

腸チフスとパラチフスはまとめてチフスと呼ばれ、パラチフスのほうが症状は軽く死亡率も低い。この病気は古代より人間とともに歩んできた長い歴史があると考えられている。漢方医学では「傷寒病」とされ、発熱・衰弱・腹痛・頭痛・便秘または下痢などといった主な症状が他の腸管感染症と共通するため、チフスの歴史を正確にたどることは難しい。県内にも、近世から大正期頃までの腸管感染症に関する記録は存在するが、それらが本当に腸チフスだったかどうかは今となっては確かめようがない。

腸チフスの病原体は、1880年にドイツのK.J.エーベルト（独）によって発見された。腸チフス菌は人間の体内のみに存在し、菌を含む糞尿で汚染された飲食物から、人間のみに感染する。コレラや赤痢と同じく、チフスも不衛生な環境と強い関連があり、洪水・高潮・戦災などに見舞われて上下水のインフラが機能しなくなることで集団発生する。徳島県内でも詳細な罹患記録が公文書に綴られてきた。

明治期から大正期にかけて俗に「腸胃熱（徳島熱）」と呼ばれた疾患も、かなりの割合で腸チフス・パラチフス・赤痢などが混在していた可能性が高いと思われる。軽症のチフスや赤痢を意識的に腸胃熱と診断して患家を安心させ、開業医が医業を安定させたという事実が、『徳島県医師会史』の調査記録にある。近代においてもなお困難である病因判定が、この伝染病に対する恐怖心や社会混乱と複雑に絡み合っていたことがうかがえる。

## 天然痘根絶への道

### ～種痘普及の努力～

有史以来、猛威を振るってきた天然痘（痘瘡・痘瘡）の脅威から権力者たちも逃れることはできなかった。徳島藩においても、第3代藩主蜂須賀光隆をはじめ藩主一族の多くがこれに罹患していたことが、正史である「阿淡年表秘録」に記録されている。

天然痘の予防法として、患者の膿を接種する人痘法が江戸時代に広く行われていたが、後期になるとより安全で効果の高い牛痘法（英国のジェンナーが開発）普及の試みが各地で始まる。中国で刊行されていた邱浩川の『引痘略』を佐賀藩医の牧春堂が要約し『引痘新法全書』を出版したのもその一例である。1849（嘉永2）年、佐賀藩が種痘苗の輸入に成功したことなどから牛痘法は蘭学者の間で急速に広がり、徳島城下でも翌年に藩医井上春洋らによる接種が実施されていたことが「かどや日記」に記載されている。

明治政府も種痘に力を入れるが人々の抵抗も根強かったらしく、「朝廷より舶来の痘苗御渡し」による種痘の普及を督促する布達が明治初期の「管内布達」などに見受けられる。種痘の普及などもあって天然痘の脅威も次第に薄れてゆき、1980（昭和55）年にWHO（世界保健機関）はその根絶を宣言した。



『引痘新法全書 乾』より

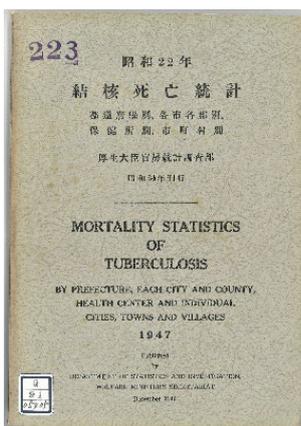
## 結核

～「国民病」と呼ばれて～

「肺病」「<sup>ろうがい</sup>労咳」とも称され、高杉晋作・正岡子規など、多くの歴史的著名人も患った結核は、わが国の主要な感染症のひとつである。厚生労働省のホームページによれば、結核は現在でも全国で年間1万人以上が新たに感染し、約2千人が亡くなるという。

1917（大正6）年に日本赤十字社徳島支部が作成した「肺結核予防の栞」には「血気盛んな少壮者<sup>わかもの</sup>の全死亡の三分の一は肺結核」「年々全国にて八万人、徳島県でも千人は死ぬ」とある。

1947（昭和22）年の統計書によれば死者はさらに増えており、徳島県で1,716人、全国で146,241人。「昭和21・22年訓令通牒指令綴」に収められている厚生省（当時）予防局課長が出した通知には「国家再建の基本的条件として結核対策要綱を定め」とあり、結核対策は戦後復興における重要項目のひとつであったことがわかる。



『昭和22年度  
結核死亡統計』

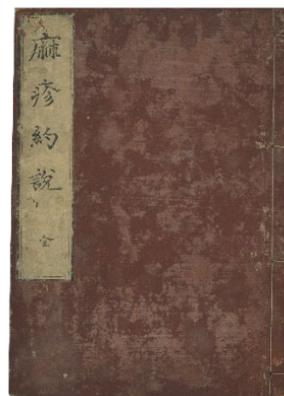
2001（平成13）年に徳島県保健福祉部が作成した「徳島県の結核の現状と対策」は、データをもとに県内発生<sup>発生</sup>の結核の特徴についてまとめている。徳島県は全国と比べて罹患率が高く、1999（平成11）年には全国5位だった。理由として「発見の遅れ」が指摘され、その要因のひとつに罹患者の周囲の者を検査する「接触者検診」の実施数が全国で2番目に少ないことを挙げている。コロナ禍の現在で言えば「濃厚接触者のPCR検査」に当たるか。当時より改善していることを願うばかりである。

## 麻疹

～強い感染力と繰り返す流行～

麻疹は「はしか」とも呼ばれ、古くからある感染症である。高熱と赤い発疹が特徴で、強い感染力を持つため、免疫を持たない者が感染するとほぼ100%発症する。富岡（現・阿南市）の吹田与右衛門にあてた書簡からは、感染が一気に広がる状況が読み取れる。この書簡は、麻疹にかかった与右衛門の内室（妻）を見舞った、江戸時代後半に書かれた手紙である。差出人である奥川屋では、家内の一人が麻疹にかかり、更に「男も女も相煩居申候、手前家内九人之内七人迄相煩居申候」と、他の者にも感染が広がっている様子がわかり、麻疹の感染力の強さを示している。

江戸時代には、江戸や上方を中心に13回ほどの大流行が起きている。このうち1803（享和3）年の流行は、『麻疹約説』の序文に、京畿（現在の京都やその周辺）で4月に広がり始めた麻疹が徳島でも蔓延していく様子が書かれている。また、全国的な大流行で多くの死者を出した1862（文久2）年は、山口村（現・阿南市山口町）や辻（現・三好市井川町）での流行の記録が見られる（『阿南市史 第二巻』『三好町史』）ことから、徳島でも各地で流行していたと想像できる。一度かかれば生涯免疫が得られる一方で、麻疹そのものに対する治療は、今なお対症療法のみである。この時代は誤った治療などで命を落とす者も多く、そのため「麻疹は命定め」の病とも言われていた。



『麻疹約説 全』

## 「パンデミック」スペイン風邪から新型コロナへ

スペイン風邪は、1918(大正7)年から1921(大正10)年にかけてインフルエンザパンデミック(世界的大流行)を引き起こした。統計は諸説あるが、内閣官房新型インフルエンザ等対策室の資料によると、当時の世界人口18億~20億人の3分の1以上が感染し、概ね2千万人~5千万人が死亡したと推計している。科学的検証が可能な中では、人類が経験した最大のパンデミックとされている。第1波(1918年)から第3波(1921年)に及ぶ日本での流行の様子は、1922年内務省衛生局刊行の『流行性感冒』に、国内感染者約2380万人・死者約38万人との報告がある。

当時、徳島県が県民に対して感染予防を呼び掛けた資料がある。1918年11月7日と1920年1月27日付で県知事から出された「徳島県諭告」第2号と同第1号である。それぞれ7項目にわたって感染症対策が書かれ「マスク着用」や「一日数回うがい」など各自が実行に努めるよう記されている。1919年2月5日発行の東京朝日新聞には、「感冒の注意書 昨日警視庁から発表」として11項目にわたる内容が掲載されており、現在の新型コロナ対策ともかなり共通している。私たちは大正時代に引き戻されたと言えるのかも知れない。他にも「一日に三百人死ぬ」「大抵死ぬ」等の記事があり、スペイン風邪が当時かなり恐れられていたことが分かる。



1919年2月5日付東京朝日新聞

日本には欧米に比べてスペイン風邪に関する歴史資料は少ないとされている。スペイン風邪から新型コロナへ。さらに新たなパンデミックに備え、歴史の検証の歩みは続く。

## スペイン風邪流行時の徳島県内の学校の対応

～ 県立城東高校の研究成果より～

徳島県女子師範学校・高等女学校(現・城東高校)の学校誌『後彫』の「大正八年付属小学校先生の移動」と題された報告において、教員2名のスペイン風邪による死去が記されている。感染してわずか1週間で亡くなり、悲しみが胸に迫る様子が綴られている。徳島中学校(現・城南高校)の校誌『渦の音』によると、1918(大正7)年10月22日に職員会で感染予防策が協議され、30日には4校時にて授業を終えた、とある。さらに、11月1日には校長から感染症に関する注意がなされると共に、2日から8日まで臨時休校とする発表があった。その後、欠席者多数のため休校は延長されている。14日には再開したが3校時までの短縮授業、15日からは5校時まで、25日からは通常に戻っている。しかし、27日には校長から運動会と定期試問の中止が発表されている。徳島県立工業学校(現・徳島科学技術高校)の「大正七年諸報告」によると、11月実施予定の修学旅行は翌月に延期され、「大正九年諸報告」では、学校近隣の民家においても流行していることなどを考慮して、1月19日から6日間の学校閉鎖を決定している。コロナ禍における学校行事の延期や中止は、先例から考えても致し方ない対応であると感じる。今、私たちは不安や残念な気持ちと向き合っているが、当時の高校生はどのような心情であったのか。

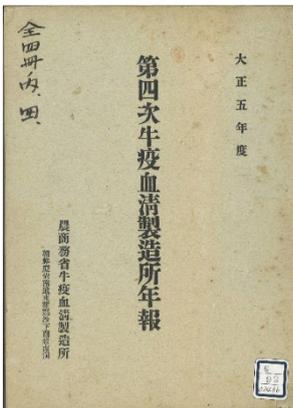
## 2011年5月25日「牛疫」根絶宣言

役牛・肉牛・乳牛。古代から牛は、人々の生活を支える重要な資産である。牛の大量死をもたらす「牛疫(リンドルペスト)」は、国家の存続をも揺るがす深刻な家畜伝染病であった。

明治期に入り国際交流も増え、食生活が変化する日本でも牛疫は猛威を奮い始める。シベリア沿岸まで流行が迫っていると情報を得た明治政府は、1871(明治4)年に日本初の家畜予防法「予防法リンドルペスト家畜伝染病」を發布。2年後には4万頭超の牛を失うほど各地で流行し、1876(明治9)年に「牛疫処分仮条例」、1886(明治19)年に「獣類伝染病予防規則」を制定する。

法規を整えつつ、1891(明治24)年、仮農事試験場(東京)に獣疫研究室を設置し、1911(明治44)年には朝鮮半島の釜山に広大な牛疫血清製造所を開設。その研究室で1918(大正7)年、ついに <sup>かきざき</sup> 蠣崎千晴博士が世界初の不活化ワクチンの開発に成功する。後には中村稔治博士が生ワクチンの開発に成功し、牛疫根絶に大きく貢献することとなる。

当館には当製造所4期分の年報が保存されており、大正5年度版には蠣崎博士の「牛疫予防接種ニ関スル実験的研究(第一報告)」が掲載されている。天然痘に続き、人類が根絶に成功した2例目となる牛疫。この第一報告は、牛疫を根絶に至らしめるワクチン開発の第一歩を記録するものと言えるだろう。



『大正5年度第四次牛疫血清製造所年報』

## 華やかさと簡素

「あわぎんホールー徳島県郷土文化会館 催し物ご案内ー」は、一流の芸術を鑑賞することを通じて文化的教養を高め、豊かな情操や感受性を養うことを目的として、あわぎんホールが毎月発行しているリーフレットである。

あわぎんホールでは、音楽イベントや演劇、歌舞伎などの様々な芸術プログラムが開催されており、徳島の人々の文化交流の場となっている。リーフレットの表紙は、その月に行われる催し物の写真で飾られており、「行ってみたい」と思わせる工夫がされている。

しかし、2020(令和2)年以降、新型コロナが流行すると、感染拡大防止のためにコンサートや演劇などが次々と中止となり、芸術に触れる機会が激減してしまった。あわぎんホールも例外ではなく、1回目の緊急事態宣言の影響で催し物が中止となったため、3月・5月はリーフレットの発行を一時休止した。6月から発行は再開されたが、表紙にはあわぎんホールの外観の写真のみが使用されるようになった。これは2021年の3月まで続いたが(1月を除く)、現在は魅力的な催し物の数々が再び表紙を飾っている。各関係者が感染対策を工夫し、開催に努めていることが伝わってくる。



「あわぎんホール」リーフレット  
(左) 2020年1月 (右) 2020年6月

展示資料一覧

No.	表題	年代	資料番号
<b>1. 痢病・痢疾(コレラ・赤痢・チフス)</b>			
1	徳島県医師会史	1976(昭和51)年	G201000079
2	改定伝染病予防心得書	1891(明治24)年	ミ702253
3	伝染病予防日誌 那賀郡立江村役場	1989(明治22)年	徳島県立文書館蔵
4	腸チフス集団発生綴	1974(昭和49)年	K201200044
5	伝染病予防(集団免疫)	1960(昭和35)年	K201200031
6	「北谷繁蔵記録」(『阿南市史史料編』)	1989(平成元年)	G199102924
7	痢疾病者共為御手当御医師様御出御逗留中諸控	1798(寛政10)年	7700090
8	流行痢疾大妙薬	(近世)	7700044
9	書簡・池部真榛から知らされたコレラの惨状	1858(安政5)年	17100009
10	沼島鹿島屋諸記録	1858(安政5)年	1707236
11	流行痢疾大妙薬	(近世)	7700044
<b>2. 天然痘・痘瘡・種痘</b>			
12	阿淡年表秘録 巻3	1851(嘉永4)年	17401690
13	引痘新法全書 乾・坤	1846(弘化3)年	7700631・632
14	明治4・5年管内布達	1872(明治5)年	K200600279
15	証(武藤峯吉種痘不善感)	1885(明治18)年	1705403002
<b>3. 結核</b>			
16	肺結核予防の葉	1917(大正6)年	7700038
17	昭和21・22訓令通牒指令綴	1947(昭和22)年	K200400297
18	昭和22年結核死亡統計	1947(昭和22)年	G199105405
19	徳島県の結核の現状と対策 -結核対策とくしま21-	2001(平成13)年	G200201206
20	非常時の予防デー 人類の強敵!結核菌を爆滅せよ(絵はがき)	(昭和初期)	S200900469
<b>4. 麻疹(はしか)</b>			
21	奥川屋孫次郎書簡	(近世中期)	7705941
22	麻疹約説 全	1822(文政5)年	17400116
23	覚(はしか処置の件)	(近世)	7705292
<b>5. スペイン風邪</b>			
24	大正7年 県報	1918(大正7)年	K200600375
25	大正9年 県報	1920(大正9)年	K200600377
26	東京朝日新聞	1919(大正8)年	徳島県立図書館蔵
27	徳島毎日新聞	1919(大正8)年	横井家文書
28	大正七年徳島県統計書	1918(大正7)年	G199300658
29	渦音	1919(大正8)年	17201765
30	大正七年諸報告	1918(大正7)年	K200800116
31	大正九年諸報告	1920(大正9)年	K200800122
<b>6. 牛疫</b>			
32	大正五年度第四次牛疫血清製造所年報	1917(大正6)年	G199202466
33	番外(伝染牛疫流行につき病牛処分の通達写)	1876(明治9)年	7700812
34	矢野亀三郎(葉書・牛疫流行の心配)	1893(明治26)年	1702434321
<b>7. 新型コロナウイルス</b>			
35	広報とくしま(No.1067, No.1079)	2020(令和2)年	G202010015
36	あわぎんホール-徳島県郷土文化会館 催し物ご案内-	2020(令和2)年	G202010033
37	朝日新聞(朝刊)	2020(令和2)年4月23日	徳島県立文書館蔵
38	県ちらし(文化の森 子どもの日フェスティバル)	2020(令和2)年	G202020002

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

☆担当職員によるやさしい展示解説

日時: 2月11(金・祝)・3月12日(土)・4月13日(水) 午後1時30分から  
会場: 文書館2階講座室・展示室

文書館の逸品展

「徳島の歴史資料に見る感染症」

令和4年2月1日発行

編集・発行・印刷 徳島県立文書館  
〒770-8070 徳島市八万町向寺山  
電話 088-668-3700  
FAX 088-668-7199